

近代日本における「文学部」の機能と構造

－人文科学・人文主義的教養の再検討－

橋本 鉦市（東京大学）

1. 問題関心と分析課題

学士課程の「専門教育」は、大学の自己評価・学部改革といった文脈の中で、社会とのレリバンズやアカウンタビリティが大きくクローズアップされてきている。大綱化以後の教養部改組と大学院重点化に挟まれる形で、そのレゾン・デートルが大きく問い直され始めているのである。こうした趨勢において、理工系の医学・工学、あるいは文科系の中でもいわゆる「実学」系の法学部・経済学部などはともかく、「文学部」は実社会のニーズから最も遠い位置にあると見なされており、様々な問題をはらんでいるとされる。

では、文学部はそもそもいかなる教育理念を持って創設され、どのような社会階層の青年層の要求に応えたのか。そして、どのような専門的知識を学生に教授し、そしていかなる人材を社会に送り出してきたのか。

本研究は、こうした問題関心の下、明治初期から現代に至る高等教育システムにおけるセクションとしての「文学部」を分析対象とし、その専門教育の機能と構造を分析する試みである。ただし、とりあえず、分析対象は明治・大正期の文学部に限定し、文学部創設の理念、その専門教育の内実、人材の選抜と配分などの分析を通して、わが国の近代化過程における文学部教育の一端を解明していく。なお、本報告では、時間的な制約のため、「帝国大学文科大学(文学部)」の教育理念、卒業生の配分と彼らが果たした役割の分析に焦点を絞り、文学部教育の機能に迫ってみたい。

2. 分析視点とポイント

まず、押さえておかねばならないのは、日本の明治以降の高等教育機関の発展が、ひとえに社会科学系統のみがとび抜けて独走するという、西欧的な発展の形とは著しく偏奇した形態をとって今日に至っており、それに対し人文科学は一貫して軽視されてきたという事実である。それは、急速な富国強兵を推進したわが国の近代化の過程では、その「後発効果」として「国家ノ須要」な「実学」を偏重する風潮が、立身出世主義や地方中産階級の子弟の実学的な「教養」と結びつく形で、青年の間に風靡していたからである。ま

たそうした志向は旧来の和漢学を否定・排除するのみならず、西欧の人文系学問をも軽んずる方向に働いた。これらの事情は、専門教育に関する先行研究にも影響しており、近代国家建設に不可欠だとされてきた法学や工学教育など実学部門がこれまで中心的に取り上げられ、人文系に関する包括的な研究はほとんどなかったのである。

したがって、こうした事実を踏まえた上で、文学部(教育)の機能と構造を考察していかなくてはならないわけだが、その際、分析の横軸には、同一機関内での他学部あるいは専門分野との比較が、また縦軸には官立セクター(東大・京大)と私立セクター(早稲田・哲学館・國學院など)、そして欧米大学(特にドイツの哲学部)との比較が有効であると考えられる。この両方向の比較を分析軸として、具体的には以下のような分析ポイントが挙げられる。

①教育理念について：

「国家ノ須要」な「実学」主義支配の風潮の中で、虚学たる「文学(部)」創設の理念と目的。加藤弘之、外山正一、坪内逍遙、井上円了など当時の文学部関係者の「大学」観「文学(部)」観の解明。近代日本の大学制度に大きな影響を与え、そのモデルとされたドイツ大学「哲学部」との比較。

②人材の吸収と選抜－入学者について：

セクター別にみた文学部入学者の社会的出自－出身地域・出身階層・教育的背景。漢学を身分文化としていた旧支配層の士族層と文学(部)との関係。実学主義と結びついた立身出世主義が席卷する中で、文学部を志した青年層の心情と論理。

③「文学(部)」の専門的知識とエートスについて：

「文学(部)」を構成する哲学・史学・文学各々の学問の制度化を担った教授集団の分析。明治以降否定された「漢学」との連続と断絶。各大学(専門学校)での教育内容・方法・卒業論文制度などの相違。各ディシプリンにおけるクリークの成立と消長(特に、京都学派の形成)。文学部における学問研究と修養主義－教養主義との関係。

④人材養成と配分－卒業生と職業の関係について：

文学部出身者の役割行動—官立セクター(帝大文学部)および私立セクター(早稲田・哲学館・國學院)出身者の就職先とキャリア・パスの比較—研究者か教養人が放蕩者か。

本発表では、以上のポイントの一部を中心に報告したい。詳細な分析は、別稿を用意している。以下に、その考察の要点をごく簡単にまとめる。

3. 考察の要点

①理念—「学制二編追加」(M6)には、外国語によって教授する高尚なる専門学校として、「文学」は明記されず、開成学校には「文学科」は設置されなかった。「文学」が制度上初めて登場するのは、明治10年の東京大学創設時においてである。20年代半ばまで東京大学—帝国大学の内部的指導者の立場にあった加藤弘之は、10年に文学部に和漢文学科、次いで古典講習科などを設置したが、こうした本邦古来の諸学を導入した彼の行動は、実学と虚学の統合を図るという大学観、また文学部には伝統的学問を存続させる義務があると文学部観に裏打ちされたものであり、その意味で加藤の大学は、ドイツ大学を理念型とする「諸学全備」の組織体でなければならなかった。そして加藤は「哲学」に学問の総合性に立脚した指導原理を求めたのである。なお、当初から、中等教員育成という理念は全く打ち出されておらず、22年に特約生教育学科が設置されたものの翌年に廃止、その議論は大正半ばの臨時教育会議と教育学講座(学科)の拡張まで待たなくてはならなかった。逆に言えば、中等教員養成の役割は教育学講座が引き受けたのであり、あくまでも他の文学部各学科がそれを期待されていたわけではなかった。

②現実—東大文学部は、史学科・哲学及び政治学科、和漢文学科を擁して発足したものの、和漢文学科はその後ほとんど機能不全に陥ったし、史学科も12年には、学生・教官ともに人材を欠く理由で廃止され、志望者の多い「理財学」にとって替わられた。また哲学の教育内容も、「純正哲学ノ如キハ其概要ニ止メ候事」と哲学的思弁が警戒されており、文学部はあくまでも実用主義的な枠組みに押し込められていたのである。また、20年代半ばまで卒業生数は一桁台を低迷しており、いかに文学部の人気なかったかを裏付けている。設立理念としては立派だが、哲学が諸学を統一するなどという理想にはほど遠く、分科大学としてのアカウントビリティすら問われ兼ねない状況だった。その後も高校からの志願者は少なく、特に、後発組の京大で

は高師卒業生の再教育機関の様相も呈していた。

③文学部のエートス—しかし、こうした小人数の研究室を単位とする教授—学生関係が維持された結果、学生・卒業生・教官の間には、一種独特のエートスが形成された。彼らの手記や回想録からは、(1)文学部は職業教育とは無縁の学問を研究する場であり、生涯にわたって「学問する」方法の伝達・受容がその教育の第一義だとする意識、(2)研究成果そのものより「学問する」ことを通して自己の鍛錬・人格の形成を図ることが重要だとする修養の態度、(3)どのような職に就こうとも、「パンのための学問」ではなく「学問のためのパン」という態度、等の共通した意識が看取できるのである。ただし、「学部の一部に漲る逃避的傾向や、孤独享樂的傾向若くは実践(或は実験)を拒否せんとする所謂頭の中での批判観賞万能主義者」といった批判や皮肉もかなり見受けられることも事実である。

④社会的配分—大正末現在の文学部全卒業生2933人の就職先を分析してみると(『東大文学部学友会会員名簿(S2年)』による)、ほぼ4人に1人が中等教員に就いており(24.1%)、次に多いのが旧制高校の教員であるが(16.6%)、無職・不明層もかなり多い(14.5%)。また、成績上位者ほど帝大や旧制高校へ就職している。つまり、文学部の中等教員創出機能は小さくはなかったが、それに大きく貢献していたのは「教育学科」であり、他の各学科の創出率はそれほど高くはない。しかも当時の中等教員全体から見れば、文学部卒業生の比率は、数パーセントに過ぎず、極めて限られていた。その一方で、旧制高校教員全体の実に2/3を文学部出身者が占めていたのであり、戦前期の教育システムにおける初・中等段階での「教育」(顕教)と高校以上の「学問」研究(密教)という二面性を考えあわせれば、文学部の「学問」するというエートスは、この旧制高校においてより効果的に発現したのではないか。文学部卒業生の「学問」を通じた人格形成という修養主義は、語学教育に著しく偏重した旧制高校のカリキュラムの中で、外国語を通じた思想・文化の伝達を通じて、高校生のエリート文化=教養主義の形成に大きな役割を果たしたのである。したがって、官学セクターにおける高等教育は、高校での人文科学偏重と大学での「実学」重視という点で、「期せずして」巧妙なバランスが保たれていたと言えるのであろう。

(*脚注・文献・資料・分析データ等は紙幅のため省略したが、当日は資料として配布する。)